



近江の古城Ⅳ 玄蕃尾城跡

米原町教育委員会 生涯学習課
課長補佐 中井 均

はじめに

戦国時代の城には石垣は用いられず、土で築かれていたことはようやく一般的にも認知されるようになりました。こうした戦国時代の土からなる城には様々な機能がありました。詰城、境目の城、陣城などです。陣城とは合戦の時の陣地や攻城戦に際して築かれる付城などのことです。

今回は陣城としては全国でも最も発達した、さらには残存状況の良好な玄蕃尾城跡を紹介したいと思います。

賤ヶ岳合戦と陣城

天正十一年（1583）、柴田勝家と羽柴秀吉との間で亡君織田信長の後継者争いが勃発しました。これが賤ヶ岳の合戦です。

ところで、この賤ヶ岳合戦といえば加藤清正や福島正則ら七本槍が有名ですが、実はわが国の合戦史上他に類を見ないほど両軍が多くの陣城を構築した合戦だったのです。

賤ヶ岳の合戦は四月二十日に繰り広げられましたが、柴田軍はすでに二月下旬には越前北庄城を出発しており、合戦までの間陣城を構築して駐屯していました。こうした勝家の近江進攻に対して秀吉もまた陣城を築いて対峙することとなりました。余呉の山々には両軍の築いた陣城の跡が20箇所

ばかり残されています。

玄蕃尾城跡の位置

近江と越前の国境に位置する柳ヶ瀬山は中尾山とも呼ばれ、近江柳ヶ瀬と越前刀根を結ぶ倉坂越（刀根越）として両国を結ぶ重要なルートでした。

さて、玄蕃尾城の由来ですが、柴田勝家の重臣佐久間玄蕃盛政の玄蕃に拠ったと伝えられています。しかし、賤ヶ岳合戦で盛政が陣を敷いたのは行市山でした。『余呉庄合戦覚書』などによると、合戦当時は内中尾城と呼ばれていたようです。

玄蕃尾城跡の構造

玄蕃尾城跡はさほど規模の大きな城郭ではありませんが、典型的な織豊系の陣城構造となっています。

主郭Ⅰは45m×45mのほぼ正方形の曲輪で



玄蕃尾城跡の主郭Ⅰを望む（手前の土塁が馬出し）



玄蕃尾城跡の主郭Ⅰ（奥の土壇が天守台）

周囲には土塁と横堀が巡らされています。この曲輪の北東隅には方形の土壇が築かれており、天守台に相当します。しかも実際に建物が建てられていたようで礎石が残されています。

主郭Ⅰの南側の虎口が正面となり、いわゆる大手口に相当します。この大手を守るために設けられたのが周囲を土塁によって構築された小曲輪Ⅱで、「馬出し」と呼ばれる施設です。さらに曲輪Ⅱの前方に土塁囲いの長方形の曲輪Ⅲが構えられており、これも馬出しであることから、大手口の前面は馬出しが連続する「重ね馬出し」という高度な築城技術が導入されています。こうした馬出しの開口部はいずれも反対方向に開口しており、主郭Ⅰへは直進できないようになっています。

この外方に設けられた曲輪Ⅳはやはり周囲を土塁で囲っていますが、最前線の曲輪として尾根筋が続く南東と南西には堀切りを設けて尾根を切断しています。

主郭Ⅰの東辺には深い横堀が巡らされ、中央部で土橋を架けて曲輪Ⅴと結んでいます。曲輪Ⅴは北国街道へ下ることができる南東の谷筋を防御するために設けられた曲輪と考えられます。

主郭Ⅰの北側の虎口は一見すると平虎口のように見えますが、よく観察すると虎口両側の土塁線が直線とならず喰い違っていることに気がきます。その前方には土塁に囲まれた

小曲輪Ⅵが突出して設けられています。こうした形態は南側の大手口の虎口と同様の構造となっています。

小曲輪Ⅵの北方には曲輪Ⅶが配されていますが、この曲輪Ⅶは扇形を呈し、城跡中で主郭よりも広い曲輪となっています。さらに興味深いのはその進入路である虎口が東に開口していますが、単なる平虎口である点です。これまで見てきた玄蕃尾城跡の虎口構造は馬出しを設け、直進させない厳重な構造となっていますが、この曲輪Ⅶだけは簡単に出入りできてしまう構造となっています。おそらく北方は柴田勝家の領国越前であることから曲輪Ⅶは越前からの補給ルート、つまり物資集積場として築かれた曲輪だったようです。このため物資が運び入れやすいように平虎口にしたものと考えられます。

このように玄蕃尾城跡の規模は東西約150m、南北約250mという小規模なものですが、非常にまとまりのある構造を示しており、営々と増築などを繰り返しながら築かれた城ではなく、計画的に設計され、築城された城であることがわかります。さらに各曲輪が直線的で、虎口には馬出しを用いるなど、戦国時代末期の高度な築城技術が導入されており、典型的な織豊系の陣城として評価することができます。

築城者とその年代

では、この玄蕃尾城はいつ頃、誰の手によって築かれたのでしょうか。賤ヶ岳合戦の陣城だから天正十一年と考えるには早計すぎる構造のようです。

ところで賤ヶ岳合戦はわが国の合戦史上類を見ないほどの築城戦であったと記しましたが、秀吉軍の陣城では、例えば秀長の陣となった田上山城跡では随所で屈曲させ横矢を効かせた土塁と横堀が巡り、虎口の前面には葎（かざし）土塁を馬出し状に築くなどやはり高度な築城技術によって築かれていることが

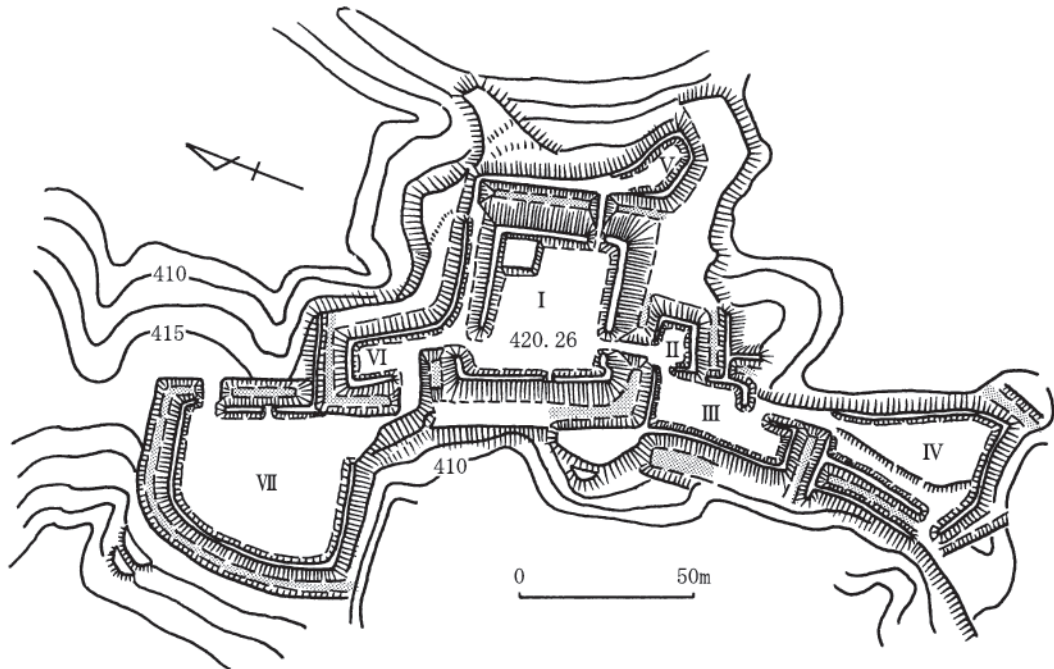
窺えます。

また、秀吉軍の最前線で堀秀政の陣となった左禰山（東野山）城跡は複雑に屈曲した土塁と曲輪内に設けられた仕切土塁によって城内が迷路状になっています。虎口についても、横矢がかかるように開口しています。特に南側の虎口は角馬出しとなり、やはり発達した織豊系の築城技術を随所に認めることができます。

ところが平面構造は玄蕃尾城跡と類似するものの、土塁の幅や厚さ、横堀の幅や深さは比較にならないほど玄蕃尾城跡の遺構が勝っています。秀吉軍の陣城群の構築は天正十一年の三月であり、臨戦体制下での築城でした。

これに対して玄蕃尾城の築城は残された遺構の状況より、それ以前にすでに築城されていたとしか考えられません。

おそらく天正十年の清洲会議の結果、長浜城が柴田勝家の養子勝豊に与えられた段階で、勝家の居城北庄城と長浜城との間に繋ぎの城として築城されたのが玄蕃尾城だったと考えられます。『余吾庄合戦覚書』によると、「(三月二十三日条) サテ勝家ハ、北ノ庄ヲ出立シテ、江北柳ヶ瀬ニ至リ、中尾山ニ陣セラレケレトモ(中略)是非ナク内中尾山ヲ本陣トシテ」とあるように、一旦中尾山に陣した勝家が内中尾、つまり玄蕃尾城に本陣を移しています。これこそ合戦以前より既に玄蕃尾城が



玄蕃尾城跡概要図



曲輪Ⅲを巡る土塁

築かれていたからこそその行動に他ありません。

一方、柴田軍の他の陣城を観察すると、例えば佐久間盛政の陣である行市山砦跡では単郭の曲輪に低い土塁を巡らせた簡単なもので、前田利家の別所山砦や金森長近の椽谷山砦、徳山秀現の柏谷山砦なども低い土塁を周囲に巡らせただけの小規模なものばかりです。柴田軍の陣城群のなかでも玄蕃尾城跡の規模、構造が圧倒的に勝っていることがわかります。

さらに秀吉軍の陣城が余呉湖北側の東西尾根上から北国街道を挟んで東方の左禰山に至るまで一直線に陣城を構え、北国街道を封鎖する形態で陣城を構築したことが窺えます。

ところが柴田軍の陣城配置を見ると山々の頂部に位置するものの、その配置は分散的でランダムなものとなっています。

このように対峙する両軍の陣城の分布状況や構造を観察すると、点在する山々にランダムに配された柴田軍の陣城は「持久戦用の駐屯地的性格としての陣城」として、一直線上に配された秀吉軍の陣城は「街道封鎖と迎撃用の陣城」として評価することができそうです。

こうした両軍の陣城構築の違いをより鮮明に示す資料として賤ヶ岳七本槍の一人であった脇坂安治家に伝わる「賤ヶ岳合戦絵図」が

あります。そこには「此内中尾山より、行市山の佐久間が陣所あたり一里余りの間、峰通を幅三間の道を造れり。」と記されています。つまり、柴田軍は賤ヶ岳まで進出して、山々に布陣後、それぞれの陣城間に軍用道路を構築します。柴田軍の陣城はあくまでも攻撃用の駐屯地にすぎません。それゆえ防御的な構造にはなっていないのです。むしろ柴田軍にとっては山中を大軍

で移動し攻撃できる軍道の確保が最も必要だったわけです。こうした柴田軍にあって玄蕃尾城跡の構造は特筆されるものであり、やはり合戦以前にすでに築城されていたとみるべきでしょう。

おわりに

玄蕃尾城跡は賤ヶ岳合戦を物語る遺跡として国の史跡に指定されています。保存整備については、曲輪の平坦面や切岸とよばれる人工的な斜面地、さらには横堀内で樹木の間伐がなされており、築城当時の土木工事の状況が非常によくわかります。また、下草の除去も行き届いています。山城跡は冬枯れの時期でないと遺構が観察できないものですが、玄蕃尾城跡ではこうしたメンテナンスのおかげでいつ行っても遺構を見ることができます。

ぜひ一度その見事な構造を見学されることをお勧めします。

滋賀文化財教室シリーズ No.201号

発行年月日 2002年3月20日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525